

広国ドリル(国語)のポイント 第1回 漢字の話

4月から始まる大学での学びを充実させるには、**これまで学んできた知識を忘れずに入学することが大切です**。これから数回、国語に関する知識の「忘れ物」を防ぐために、今のうちに改めて確認してほしいことを書きます。ざっと目を通して、広国ドリルに取り組んでください。

今回は、漢字についてです。みなさんもよく知っているとおり、**漢字は、形と意味と音で1セット**です。そして、多くの漢字の形には、音や意味の手がかりが「パーツ」として組み込まれています。

例えば、「編」「偏」「遍」は、すべて「ヘン」と読めます。それが分かるのは、「扁」というパーツがあるからです。逆に言えば、パーツの読みから音を推測することができます。「編纂」のように見慣れない言葉でも、とりあえず一字目は「ヘン」と読めます。ちなみに二字目は…「サン」です。なんとなく、「算数」の「算」と似ていますね。

ある言葉を書き表すときに、どの漢字を使うか選ぶときは、漢字の意味を考えます。**音が同じ漢字のなかから選ぶときには、「部首」とも呼ばれるパーツが役立ちます**。例えば、「おヘンロさん」の「ヘン」は、どの「ヘン」でしょうか。

…答えは、「遍」です。この漢字の部首は、「しんにょう」(「扁」以外のウネウネしたパーツ)で、元々「道を行く」といった意味をもつ部首です。お遍路さんは、「道を歩いて四国各地を巡るので、道に関係があるかも」と考えることができれば、漢字が決まりますね(「お遍路さん」を知っていれば、ですが)。**どの漢字がよいか迷ったら、部首にも注目**してみましょう。今さら部首なんて言われても、覚えてないという人は、広国ドリルで復習しましょう。

漢字を思いついても、**意味がはっきりしないときは、その漢字の「訓読み」**を考えてみるのも一つの手です。「偏」は「かたよ-る」、「編」は「あ-む」、「遍」は…少し難しいですが「あまね-く」と訓読みします。「偏る」から考えれば、「ヘンケン」は、「偏」だと分かりますね。

ちなみに、訓読みは、日本語固有の読み方です(元々ある日本語音を、意味的に近い漢字にくっつけたもの。元々あった「やま」という日本語音を「山」にくっつけた、とか)。**訓読みは、多くの場合、音を聞いただけで意味が分かります**。音読みは、中国語の漢字の読み方をまねたもので、基本的に1音か2音です(仮名で書くと3文字以内)。音だけでは、意味がはっきりしないことが多い読み方です。例えば、「木」は、「き」が訓読み、「モク」が音読み。

区別がしにくい漢字もあります。「訳」という漢字は、音が「ヤク」、訓が「わけ」です。「駅」は、「エキ」が音読みです。区別ができなくても、読めればいいですけどね。

訓読みが同じでも、意味(使い方)が異なる漢字には注意しましょう。例えば、「あう」「会う」「合う」「遭う」などと書けます。選択で迷ったら、その漢字を使う他の語、例えば、音読みの語を考えてみましょう。「会食」「合計」「遭難」といったところでしょうか。何となく、それぞれの漢字の意味が反映されていますね。

同じ漢字で書いても、音読みか訓読みかで意味やニュアンスが異なる熟語もあります。その場合、文脈に注意して読み方を判断しなければなりません。例えば、「人気」は、「ニンキ」と読むか、「ひとケ」と読むかで、意味が全く違います。「人気のない大学」は、どちらで読んでも寂しいですが、「冬休みで」という文脈なら、「ひとケ」と読んだほうがよいでしょう。

「水面」は、「スイメン」とも「みなも(みのも)」とも読めます。表すものは大体同じですが、言葉の持つ雰囲気が少し違います。ニュースなどの報道では「スイメン」、詩、文学的な文章、歌詞などでは、「みなも」と読むことが多いようです。「鬼滅の刃」の主人公、竈門炭治郎の「水面斬り」は、「みなもぎり」と「スイメンぎり」と、どちらが技や作品の雰囲気に合っているでしょうか？

特定の熟語で、漢字本来の読みとは、違う読み方をする場合もあります。例えば「眼鏡」。読めますか？「メガネ」ですね。「眼」が「メ」はいいとして、「鏡」はガネ(カネ)とは普通読みません。ある熟語のときだけ、特殊な読みをする場合(熟字訓とも言います)もあるので、注意しておきましょう。

漢字の読みや選択、部首などについては、広国ドリルでたくさんの実例を使って復習できますので、ぜひ取り組んでみましょう。

ところで、漢字は中国から来たはずなのに、訓読み(日本語読み)しかない「漢字」もあります。なぜでしょう？ 答えは次回。

健康科学部医療福祉学科 杉本 巧